pathos appreciation of the fleeting nature of beauty

もののあはれ
無常の美

2025年6月25日(水)
〜7月1日(火)

井津建郎
Inoue Ken

阪急うめだ本店7階 美術画廊
午前10時—午後8時［入場無料］
※最終日は午後4時終了

Hankyu

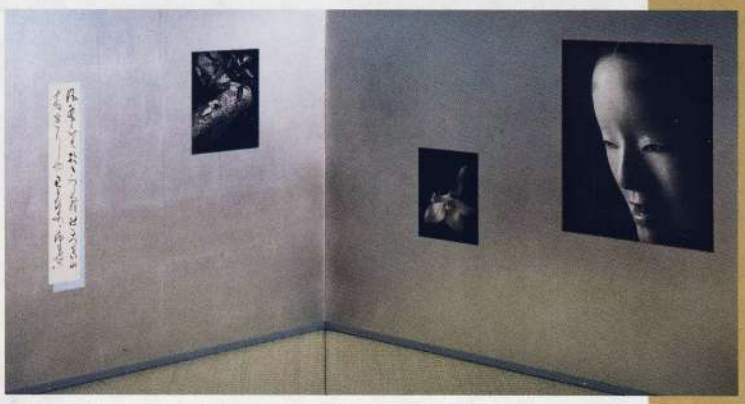
『葵上』65cm×150cm、和紙プラチナ・プリント、古銀箔、墨、古裂　2024 年

『もののあはれ』という言葉は古代から人の生活の一部として存在していたと言われるが、平安時代から鎌倉時代までに、自然の移ろいや人生の機微にふれたときに感じる情趣を意味するとされ、人生や移り変わる季節に対して、繊細な美や感覚を和歌に託することが多い。

私は写真家として過去 50 年間アメリカのニューヨークに住みながら、アジアを中心に中近東、ヨーロッパ、南米、など多くの国々の古代遺跡を訪ねて撮影してきたが、近年は聖地を守り続けている人々や、心の内にある精神美に魅了されるようになった。近年の作品では人間の内にある精神美に惹かれて、インドの聖地ガンジス川流域で生まれ、そして死んでいく人々の生き様に無常の美を感じて作品とした“永遠の光”を制作した。

数年前に兵庫県、丹波篠山の能楽資料館でいくつかの能面に出会った時初めて長年慣れ親しんだ西洋の美とは異なる、日本固有の美に目覚めた。同時に能楽という中世日本に発祥した芸能自体にも俄然興味が湧いてきた。初めて能面を見た時に心を打たれたのは、中世から代々能面を受け継がれてきた所有者（多くは能楽家）の想いや、制作した能面師の想い、また数百年の間その能面を守り続けた人々の愛、そして何よりもその能面で演じられてきた役が数百年の演舞の間に染み込んだ執念のように、奥深くも美しい精神性に感じ入ったからである。

しばしば幽玄という言葉で表現される能楽は侘び、寂びと並んで日本の文化の代名詞のようにその禁欲的な美がまさに能楽の真髄とも思われ、それが 600 年以上も続いてきたのである。私の『もののあはれ』は能面作品を軸として、人知れず路傍に咲き、そして枯れていく草花の静物作品と古代磐座や能楽の始まりとも言われる神話の世界での舞、そして神に奉納される神楽や後の猿楽などが演じられた神社をとりまく神域の気配を捉えた作品で構成し、私なりの解釈としての“無常の美”を表現した作品である。本作品は表装によって本来写真が持っていた工芸的要素に回帰して、和紙にプラチナ・プリントまたは銀塩プリント、どちらも全て暗室での手仕事の作品に銀箔と古裂のマット、掛け軸、或いは風炉先として工芸美も加えて表現した作品である。



『井筒』68cm×180cm、和紙プラチナ・プリント、古銀箔、墨　2024 年

井津建郎 Kenro Izu

1949年に大阪・豊中に生まれる。1971年に日本大学芸術学部在学中に21歳で渡米、1975年にスタジオ設立以来 2021年までニューヨークに在住、活動を続ける。1979年にライフワークとなった『聖地』シリーズを開始、2016 年まで超大型カメラを使ってプラチナ・プリント技法で作品制作を続ける。

主な作品にはカンボジアの『アンコール遺跡』、インドに取材した『永遠の光』、イタリア・ポンペイの『レクイエム』他、静物、ヌード作品など。『Sacred Places』（2001 年）をはじめとして『Eternal Light』（2016）『無常：50年の旅』（2022）など 20 冊の作品集を出版。作品は Metropolitan Museum of Art（New York）, Arthur M. Sackler Gallery（アメリカ・スミソニアン美術館）、ボストン美術館、清里フォトアートミュージアムなど数多くの美術館に収蔵されている。アメリカ連邦芸術基金、ニューヨーク芸術基金、グッゲンハイム基金、Lucie Visionary 賞、Lou Stouman 賞、日本写真芸術学会・芸術賞などを受賞。

「能楽大連吟」～阪急 DE 謡隊～　能「羽衣」・「竹生島」（大連吟）　井上裕久、吉浪壽晃、浦部幸裕ほか
6月29日（日）午後 2 時開演　阪急うめだ本店 9 階 祝祭広場　※催し内容が一部変更になる場合がございます。

もののあはれ　無常の美

Hankyu
阪急うめだ本店
〒530-8350
大阪市北区角田町8番7号
電話（06）6361-1381

連日　午前10時→午後8時（阪急メンズ大阪、レストランなど一部売場を除く）　※営業時間が変更になる場合がございます。

ケインドレイク木彫り倶楽部